



英語・小論文

試 験 科 目		ページ	解答用 紙枚数	時 間	
英 語	〔英語コミュニケーションⅠ， 英語コミュニケーションⅡ， 英語コミュニケーションⅢ， 論理・表現Ⅰ，論理・表現Ⅱ， 論理・表現Ⅲ〕	から1科目	1～ 4	2 枚	70 分
小論文			5～13	1 枚	90 分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は13ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には監督者に申し出ること。
3. あらかじめ届け出た試験科目(英語，小論文の内の1科目)を解答すること。
4. 解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。
5. 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
6. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
7. 英語の解答用紙の右下にある破線枠内には何も記入しないこと。
8. 解答用紙は持ち帰らないこと。

英 語

I 次の英文を読み、下の設問(1)~(5)に日本語で答えなさい。

It's true that human beings are fundamentally the same. At a deep level, no matter where we come from, people are driven by common physiological and psychological needs and motivations. When we are nervous or elated, we all find our hearts beating faster. When we are depressed, we all feel enervated and exhausted. We all feel common human emotions such as jealousy, excitement, sorrow, and passion. At a deep level, we are all the same species. In this sense, no matter which culture we come from, humans are the same.

Every individual is different. Even when raised in the same community, by the same parents, working in the same environment, no two individuals are precisely the same; each of us has a unique style and set of preferences, interests, aversions, and values. No matter who you are working with or where that person comes from, you should begin any relationship with the desire to understand what is specific and unique to that individual. Don't assume that you can determine anything specific about how they will think or behave from what you know about their cultural background.

The culture in which we grow up has a profound impact on how we see the world. In any given culture, members are conditioned to understand the world in a particular way, to see certain communication patterns as effective or undesirable, to find certain arguments persuasive or lacking merit, to consider certain ways of making decisions or measuring time “natural” or “strange.”

Leaders have always needed to understand human nature and personality differences to be successful in business — that's nothing new. What's new is^(a)
the requirement for twenty-first century leaders to be prepared to understand a

wider range of work styles than ever before and to be able to determine what aspects of an interaction are simply a result of personality and which are a result of differences in cultural perspective.

When we worked in offices surrounded by others from our own tribe, awareness of basic human psychological needs and motivations, as well as a sensitivity to individual differences was enough. But as globalization transforms the way we work, we now need the ability to decode cultural differences in order to work effectively with clients, suppliers, and colleagues from around the world.

[Adapted from Meyer, E. (2014), *The Culture Map: Decoding How People Think, Lead, and Get Things Done across Cultures*]

- [注] physiological : 生理的な psychological : 心理的な
elated : 高揚した enervated : 無気力な
aversion : 嫌悪, 反感 condition : 慣らす, 訓練する
persuasive : 説得力のある decode : 解読する

[設問]

- (1) 「人間が根本的に同じである」のはなぜですか。
- (2) 人間関係はどのような気持ちで始めるべきだと述べられていますか。
- (3) どんな文化においても、メンバーは4つのことをするように習慣づけられると書かれています。それら4つの例をあげなさい。
- (4) 下線部(a)の意味を日本語にしなさい。
- (5) グローバリゼーションが働き方を変容させるにつれて、どのような能力が必要となると述べられていますか。

Ⅱ 次の(1)~(5)の空所()に最も適当な英語の単語(1語)を入れて、対話の意味が通じるようにしなさい。

- (1) A: We have a lot () common, don't we?
B: Yeah, we both live in Fukushima and have two brothers.
- (2) A: Why were you upset in the committee meeting?
B: I am a professional and expect to be treated () such.
- (3) A: How many sisters does he have?
B: He has (). He is an only child.
- (4) A: I was stopped at the subway ticket gate! I couldn't get in.
B: You must have put your ticket in upside ().
- (5) A: He took medals in two Olympics in a ().
B: That's amazing! It must have been in the 2020 and 2024 Games.

Ⅲ 次の(1)~(5)が正しい英文になるように、それぞれの()の中の単語を並べかえなさい。解答用紙には()内のみ記入すること。

- (1) The city had (suffering, reputation, from, a, bad, been) due to severe air pollution.
- (2) The battery (middle, out, in, of, ran, the) the call.
- (3) The (are, willing, adapt, to, to, employees) the new project.
- (4) He was (to, truth, tell, them, the, supposed) about what really happened last night.
- (5) It was (who, to, Nancy, book, gave, this) her.

Ⅳ 次の(1)と(2)の質問から 1 つを選び、100 語程度の英語で自分の考えを書きなさい。How are you? は 3 語と数えます。また解答用紙の()に選択した質問の番号を記入しなさい。

- (1) Which do you prefer, studying alone or studying in a group?
- (2) What are the characteristics of a good leader?

小 論 文

以下の資料は、谷川嘉浩『人生のレールを外れる衝動のみつげかた』(ちくまプリマー新書、2024年)からの抜粋である。これを読んで、次の設問すべてに答えなさい。なお、出題にあたっては小見出しを省略し、一部表記を改めた。

問Ⅰ 資料を600字以内で要約しなさい。

問Ⅱ 両親や先生など周りの大人が期待する目標に反して、自分の中から湧き出す衝動に駆られて突き進むことをどのように考えますか。あなた自身の経験を事例として選んで、その内容と理由について600字以内で具体的に述べなさい。

解答は、解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答にあたっては、解答用紙の1マスを1字に使い、句読点、引用符、カッコなどはいずれも1字として扱う。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。

<資 料>

イメージを共有してもらうために、少しだけ『チ。』(出題者注：魚豊による漫画『チ。地球の運動について』(小学館)のこと)の設定を見てみましょう。第1巻の紹介文(商品説明)はこんな感じです。

動かせ 歴史を 心を 運命を——星を。

舞台は15世紀のヨーロッパ。異端思想がガンガン火あぶりに処せられていた時代。主人公の神童・ラファウは飛び級で入学する予定の大学において、当時一番重要とされていた神学の専攻を皆に期待されていた。合理性を最も重んじるラファウにとってもそれは当然の選択であり、合理性に従っている限り世界は「チョロい、はずだった。しかし、ある日ラファウの元に現れた謎の男が研究していたのは、異端思想ド真ん中の「ある真理」だった——

この異端思想とは、「地動説」のことです。地球が中心にあり、その他の天体が地球の周りをまわっているのか(天動説)、それとも、太陽の周囲を地球が回っていて、地球は宇宙の中心でも何でもないのか(地動説)は、世界観をめぐる大きな争点でした。

当時のキリスト教では、神が自分の似姿として創造した人間に特権的な役割を与えたという考えが強く共有されていました。その社会では、人間の住んでいるこの地球という大地が宇宙の中心だと考えるのは自然なことです。

それに、幼い頃から地動説に触れていた私たちは忘れてしまっている感覚でしょうが、手ぶらで星々を観察し、ゼロから天文学を作り上げていくことを想像すると、観測地点としての「大地」を起点に物事を考えることの方が自然に思われます。「東から太陽はのぼって、西に沈んでいくんだよ」とか、「北斗七星があるのは、もう少し右上ね」などといった言葉で会話することが今でもあるでしょう。

こうした言葉遣いは、突き詰めて行けば天動説につながっています。天動説は、日常的な感覚や会話に馴染みやすいところがあるわけですね。こういう言葉を妙に感じないのだとすれば、天動説が私たちの素朴な感覚に訴えるところがあるからでしょう。天動説は、それくらいには説得力があります。それもあってか、西方ヨーロッパ

社会では、キリスト教が伝播^{でんぱ}して以降、宗教的信念に裏打ちされて、より堅固な地盤を得ました。

地動説は、これに対してノーを突き付けていきます。これは、単に天文に対する考えを変えるかどうかの問題ではなく、既存の社会秩序全体に対する挑戦と受け取られかねない異議申し立てです。世界に対するキリスト教的な説明の権威を疑っていると思われかねない。説明文にも出てきていたラファウという少年は、こうした意味合いを持つ地動説に傾倒していくことになります。

『チ。』の第1巻に登場するラファウという少年は、他者や世界を冷めた目線で見つめて、世間で何が認められるかを意識し、そのレールに乗って社会を乗り切っていくとする秀才です。ちょっとシニカルなところがある‘賢い、少年だと言えば、雰囲気は伝わるでしょうか。自分は頭がいいし、器用だし、他の連中とは違うと思っているような人です。

友人関係も、教師との関係も、空気を読んで「正解」をなぞるように生きていけば問題がないし、人生ってチョロいなと思っているわけですね。彼には、そうするだけの識字能力も、社交性も、学力もありました。それにもかかわらず、人生のレールを外れるように、彼は地動説の研究へと惹かれていきます。

こういう要領のいい人、効率よく世渡りしていく人っていますよね。みなさんの周囲にも、きっといるはずです。ちなみに、漫画『ブルーピリオド』（講談社）の主人公・矢口八虎も、最初の頃はラファウのような人物として描かれています。世界を斜に見ていて、要領がよく、そつがないけれど、次第に、自分でも惹かれるとは思っていなかった絵描きへの情熱に駆り立てられていきます。

話を戻しましょう。世渡り上手だったラファウは、しかし色々あって社会で共有された「天動説」を捨て、「地動説」を信じるようになります。もちろん、地動説は当時「異端」とされた発想で、社会の秩序やルールを脅かす危険思想みたいなものです。だから、それを信じたために、最終的には迫害や死につながるかもしれない。

地動説へと傾きつつあることを周囲に気づかれたラファウは、天文学関係の書類を燃やすようにと言いつけられるのですが、彼はそれを拒否してこう言います。

〔書類を〕燃やす理屈、なんかより！！ 僕の直感^{はや}は、地動説を信じたい！！

短いけれど読み解き甲斐のある言葉なので、ゆっくり解釈してみましょう。

「要領のよさ」や「立ち回りの器用さ」なるものが、世の中ではしばしば持て囃^{はや}されます。年を重ねるにつれて、大抵の人が身につけていくものです。要領のよさとは、いわば、社会の「理屈」に従順になって、その中で、そつなく生きていくことです。『チ。』の内容に即して言えば、「地動説など忘れて、上の人が言う通りの考えを信じる」のが、要領のいい生き方です。

それに対して、「地動説に固執して、あくまでもそれを探究する」のは、不器用で要領が悪い生き方にほかありません。地動説の研究を続けては、その人や周囲に命の危険が及ぶわけですから、そんなもの諦めてしまうのが「賢明」だと言えそうです(少なくとも、世の中の「理屈」からすれば)。あるいは、大っぴらには地動説を放棄したふりをして完璧に演技し、鍵のかかった自分の部屋の中でだけ記録を残さずにこっそり探究を続けることも不可能ではないでしょう。

それにもかかわらず、ラファウは、自分の「直感」が語るところに従って、地動説の探究をあくまでも続けたいと宣言するのです。もちろん彼も、地動説の探究を放棄するのが「合理的」だということは頭ではわかっていますが、そうした判断を踏まえてもなお、彼の衝動が、地動説を信じ、探究する方へと彼を連れていっているわけです。

そうした感覚を表現するために、「理屈」ではなく「直感」を頼っていると表現されていることが印象深いように思われます。科学の話題であるにもかかわらず、ラファウが地動説を信じるのは、「理屈」では説明がつかない。だから、衝動的なニュアンスのある「直感」という言葉が選ばれているのだと思います。要するに、ラファウが天動説を捨て、地動説へと走ったのは、頭で考えた結果というより、どうしても心^{こころ}がそう叫んだからなのです。

自分でもコントロールしきれないくらいの情熱、過剰なパッション、非合理的な衝動、直感——。こういう言葉で指し示そうとしているのは、やむにやまれぬ感覚、つまり、合理的な説明のつかない衝動のことです。理屈で組み立てたものでもないし、メリットやデメリット、パフォーマンスや効率を考えて生まれるものではありません。エビデンスもない。

ラファウにしたって、普通に考えるなら、命の危険を冒してまで知識を追い求めることはないわけです。そんなことをする理由はどこにもないように思えるし、彼自身もそれを認めています。それにもかかわらず、自分でもどうしてもわからないままに、彼は突き動かされている。こういう欲望のことは、「衝動」や「情熱」と呼ぶほかないように思われます。

(中 略)

メタファーというのは、「たとえ」のことだと思ってください。メタファーが持っている構造(一連の連想)は独特の力を持っていて、知ろうとする謎との相性さえよければ、捉えどころのなかったはずの謎に対して「輪郭」を示してくれることがあります。つまり、メタファーは私たちの探究を導いてくれるのです。

今回用いるのは、「幽霊」のメタファーです。衝動は、どこか幽霊に似ています。幽霊が人に取り憑くとき、幽霊は人に働きかけ、人間の意思決定や判断を左右します。これは、私たちが望んでいなくてもそうなります。衝動もそれと同じです。

例えば『チ。』のラファウは、命を危険にさらしたくなかったはずですが、その思いを突き抜けていくように、地動説へと走って行きました。衝動には自分の思いや事情を突き抜ける力がある。自分の衝動であったとしても、それをコントロールしきれないという性質があるのです。

「衝動」と「幽霊」を重ね合わせるなんて意外だと思われたかもしれませんが、この発想は全くのオリジナルというわけではありません。興味深いことに、英語の“possessed”という形容詞は「何かに所有された状態」、転じて「何かに心を奪われた状態」を指していますが、この言葉には「憑依ひょういされた」「取り憑かれた」という意味もあります。何かほかのものに主導権があるみたいに、何かに向けて突き動かされている状態を指しているという点で、「夢中」と「憑依」が重なっているのです。

さらに言えば、恐怖などの感情や悪魔などが「取り憑く」「悩ませる」という意味の動詞“obsess”から派生した“obsession”という名詞も、この連想と同じ系列に置くことができるでしょう。これには、「妄想」「強迫観念」という意味もありますが、転じて「やばいくらい熱中していること」「病みつきになること」「取り憑かれたみたいにハマ

ること」などを表現するときにも使われます。こなれた文章を書く人の中には、カタカナで「オブセッション」と表記する人もいますが、これは衝動に憑依されることを指しているわけです。

いずれにせよ、ここで確認しておきたいのは、「衝動」という捉えがたい概念を「幽霊」のメタファーで読み解いていくのが本書の立場であり、その連想は私が強引に作ったものというより、人間が作ってきた文化に潜在する想像力に基づいているのだということです。しかし、その想像力は潜在的なものではっきりとした形を帯びていません。人間が育ててきたその潜在的な想像を明確な形で提出するのが、この本の仕事です。

これまでの説明を読んでいて、「おもしろそうやけど、そもそも、なんで衝動とか情熱について、わざわざ論じなあかんの」という声も聞こえてきそうです。本を読み慣れない人への配慮として、先回りして指摘しておきたいと思います。

衝動は、世に言う「将来の夢」や「本当にやりたいこと」を突き抜けて、もっと熱中へと誘ってくれる欲望だからです。具体的には、人生の岐路に立ったときに、自分の衝動を観察し、解釈していくことが助けになってくれるはずです。そう言われてもピンとこないと思うので、「将来の夢」と「本当にやりたいこと」に分けて考えてみたいと思います。回り道をしながら答えるので、ご注意を。

「将来の夢」とはなんのでしょうか。大抵は、小学生かそれ以前から、大人に聞かれるものです。大人が読む場合は、「将来像」とか「ヴィジョン」に置き換えるといいかもしれません。昔からずっと色々な人に聞かれ続けてきたことでしょう。

将来の夢について聞かれたとき、素直に思いついたことを言ってみたら、「えーそれは無理やわ」と突き返され、世間的な「正解」の範囲に収まるように、自分の気持ちを作り替えたり、押し殺したりすることを余儀なくされることは珍しくありません。あるいは、予め大人が喜びそうなことを言って話を終わらせることもよくあります。言ってみれば、子どもは大人の思う通りの望みを抱けという付度そんたくを強いているわけで、これはどうにも窮屈です。

将来の夢の話になると思い出すエピソードがあります。友人の息子さんは、先生に夢のことを聞かれて「犬と暮らしたい」と伝えたら、「そういうことじゃない」と言われ

たそうです。彼に犬との暮らしへの切なる思いがあれば、それはそれとして素敵なことだと思いますが、大人の期待する返事じゃなかったみたいです。犬と暮らすのってむちゃくちゃいい将来像だと思うんですけど。

つまるところ、「将来の夢」は、世間や周囲の人が「正解」だと信じていて、あなたに言ってほしいことの総体です。友人の子どもの事例もそうです。子どもは、社会や周囲の大人の様子を見ながら、それに見合ったやりとりを繰り返すものですから、彼もいつのまにか世の中の「理屈」に沿って返答を口にするようになり、最終的には「犬と暮らす」という思いを押し殺してしまうのかもしれませんが。でも、「あなたの将来」が周囲の期待に沿っている必要はありませんよね。

周囲の期待に振り回される状況に嫌気がさした人が飛びつきがちなのは、「本当にやりたいこと」です。「本当にやりたいこと」と表現すると、周囲に左右されず、自分の内から湧き上がる不動にして不朽の欲求を言い当てている気がしてきます。周囲の期待の反映である「将来の夢」なんかよりずっとよさそうに聞こえます。

しかし実際のところ、「本当にやりたいこと」として人が語っているのは似通っていて、あまり多様性がありません。私の見るところでは、「本当にやりたいこと」として語られるのは、①世間的に華々しいスポットライトを浴びているものか、②今の自分が「正解」だと思っているもののどちらかです。順に説明しましょう。

まず、①の方から。俳優、モデル、声優、ミュージシャン、スポーツ選手、アナウンサー、文筆家、インフルエンサー、配信者(ライバー)、クリエイターなどのみんなが憧れる職業や生き方、あるいは、そういう人のいる業界に入ることこそ、自分のやりたいことだと語る人は実に多くいます(大学教員をやっているとよく見ます)。

実際にそれをやりたいと考え、成し遂げてしまう人もいるでしょう。しかし、多くの人は、「みんながいいと言うもの」を自分のやりたいことだと考えているにすぎません。言葉を選ばずに言えば、チャホヤされたいだけですよね。この欲は誰しも持っているもので、ただちに責められるべきものではありません。しかし、こうしたキラキラした世界への憧れは、それを実現した先には会議や書類仕事などの地味な実務、人から注目されることによる心労などが避けがたく生じるのだと想像もしていない場合がほとんどでしょう。大抵の人は、憧れている事柄の実情に関心を抱いているのでは

なく、その権威や名声に漠然と惹かれているにすぎないのだと思います。

次に②の方へ。屋久ユウキさんの小説『弱キャラ友崎くん』（小学館）には、「人間が言う『本当にやりたいこと』なんて、今の自分が、たまたま、一時的にそれが一番良い状態だと勘違いしている幻想でしかない」という台詞がでています。実際の文脈は、私の意図とはちょっと違うのですが、今の自分が「正解」だと思えることが「本当にやりたいこと」と等置されている現状に対する批判として、この言葉は妥当だと思います。

大抵の人は、生まれてからこの方、好みも行動もやりたいことも大きく変化してきたはずです。お花屋さんになりたいとつぶやいた幼稚園児がそのままお花屋さんになった事例はほとんどないでしょう。これは大人でも同じです。今の自分がパッと心惹かれているもの——次のタイミングでは違うものになっているだろうもの——を、わざわざ「本当」という重たい言葉でくるんで固定しようとするのは、自分の変化の兆しを見えなくする言葉遣いです。

むしろ、私たちに必要なのは、これが「本当に」やりたいことだと、重たい言葉でくるんで固定するのをやめることです。つまり、自分のやりたいことが知識や経験の増大につれて変化するのを許容しつつ自分の将来を模索するには、「本当にやりたいこと」などという言葉遣いを避けた方がよさそうです。

以上を踏まえて、「なぜ衝動を扱うのか」というと、『将来の夢』や『本当にやりたいこと』を突き抜けられるからだ」という説明を理解することができます。

今一度、『チ。』のラファウを思い出してください。彼は将来の夢のことなど考えずに天体の研究に取り憑かれていました。天文学に没頭した先に待っているのは自らの破滅であって、それは「将来像」たりえませんよね。キャリアデザインもなにもありません。身を危うくするわけだから、みんなの憧れでもないし、今の自分が思う望ましいキャリアでもない。

この事例からわかるのは、「衝動」が見つかってしまったら、かえって将来のことなど——あるいは自分のことすらも——どうでもよくなるということです。それが衝動に駆り立てられた人の姿です。衝動を持つ人は、将来につながるか、職業にできるか、評価されるか、評判がいいかなどといったことを一切気にせず、どこまでもひた

すらその活動に身を捧げるものです。

まともな民主主義社会では、ラファウが直面したような破滅の脅威はありません。その代わりに、将来への計画性、数値的な評価しやすさ、すぐに役立つこと、効率性、パフォーマンスが何よりも求められます。しかし、そんなものを脇に置いて、とにかく活動に集中させてしまう力が衝動にはあります。普段は関心を抱いているはずのことを忘れ、それらを脇に置かせ、夢中になっている事柄にひたむきにさせる力があるのです。

そして、このひたむきさは、地道な練習を助けてくれる力です。何かに夢中になっているとき、他の人なら苦痛に感じるだろう時間が苦ではなくなります。例えば、絵を描く衝動に取り憑かれている人は、それを向上させるためのデッサンや構図の練習などの地道で基礎的な訓練を、砂漠が水を吸収するような勢いで貪欲に進めていくはずです。もちろん挫折はあるでしょう。でも、魔法をかけられたみたいに、そこから離れられず、ずっと取り組んでしまうはずです。

「何かを学びたい、身につけたい」と思うとき、衝動がその背景にある方がずっと持続するし、遠くまで行くことができます。今の自分の手が届く範囲を超えて、ずっと遠くのものに触れるために何かを学びたいのだとすれば、きっと「衝動」が必要です。自分でも説明がつかないくらい、非合理的な衝動が。

令和8年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

経済経営学類 一般選抜 後期日程

出題資料は谷川嘉浩『人生のルールを外れる衝動のみつかけかた』（ちくまプリマー新書、2024年）のうち、序章の一部分（11頁から28頁）である。問Ⅰでは資料の要約を求め、問Ⅱでは中高生の時の夢中になった経験を踏まえ、本書の「衝動」に対する解答者の考えがどうなるかを、具体的な事例を挙げながら示させるようにした。これらの問を通じて、解答者の読解力、知識活用力、表現力等を総合的にみるように設定した。

I	From The Culture Map by Erin Meyer, copyright © 2014. Reprinted by permission of PublicAffairs, an imprint ofHachette Book Group, Inc.
---	--